

2020年6月28日

十字架を取って歩む

今日は年間第十三主日と共に「聖ペトロ使徒座への献金」の日にあたっています。昨年、訪日された教皇さまを思い起こし、世界に広がる教会と心を合わせて、共にこの困難な時期を乗り越えていくための豊かな恵みが全世界の教会に与えられますように祈りたいと思います。マタイ福音書の中でイエスさまは「自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない」（マタ10・38）とおっしゃいます。そこでは弟子として歩むための心構えや段階が示されていると考えることもできるでしょう。

人はそれぞれ固有の与えられた責任や使命があり、それを自ら取って前に進む時、豊かな慰めと報いを受けます。反対に、嫌々ながら自分の使命や責任を果たそうとする時、必要以上の重荷や圧迫を感じるようになりがちです。もしイエスさまが、嫌々ながらご自分の十字架を担われたとすれば、わたしたちの教会の中心には、磔刑の十字架が置かれていなかったかもしれません。イエスさまが、自ら進んで十字架の道を歩んでくださったので、わたしたちはたとえ嵐や逆境の中に置かれても、勇気を出して、イエスさまの後を弟子としての誇りをもって歩み続けることができる、と気付かされます。神さまがわたしたちに与えてくださった計り知れない人間の尊厳と自由という可能性をキリストの十字架の内にこそ見いだすことができる、と言ってもよいでしょう。自分の十字架を取って歩むことの意義について『キリストにならう』は次のように説明しています。

「あなたは今、死ぬべき人として生きなければならないことを忘れてはならない。人は、自分に死ねば神に生きはじめる。キリストを愛するために、喜んで苦しみを忍ぼうとしないかぎり、天のことを理解する値打ちはない。快くキリストのために苦しむこと以上に、神に喜ばれ、またこの世であなたの靈魂のために益することはない。」（『キリストにならうーバルバロ訳』ドンボスコ社）

第二朗読のローマの教会への手紙の中でも、聖パウロは「あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい」（ロマ6・11）と述べて「大切なのは、新しく創造されることで

す」（ガラテヤ6・15）と強調しています。わたしたちは、キリストの十字架の内に、いかなる状況にあっても、新しく創造されながら、喜びをもって生きることができる恵みを受けているのです。

わたしたちの近くにいる隣人や「小さな者の一人」（マタ10・37）に対して、自分にできることで、善いわざを進んで実践する勇気が与えられますように、聖霊の助けを願い求めたいと思います。

「神よ、あなたの輝きを知り、
その光の中を歩む民はしあわせ。」
(詩編89・16)

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝